２８年12月３日（土）

「関東の城郭（城館跡）形成とその画期」峰岸純夫氏

中世の武士の拠点を考える場合、館と城（併せて「城館」）がある。その展開を時代とともに考えてみたい。

第一、館の展開

十一世紀の荘園公領制の発展、それを現地で支配する下司・地頭と称する武士が成長・発展する中でその支配の拠点に設置された館が出現する。館は方形館と称されるが正確な方形ではなく、やや大形状のものが多く、また東北隅を少し削って、悪霊（鬼門）の侵入を防ぐと言うものもあった。

十二世紀以降鎌倉時代は幕府成立などもあって武家の方形館の時代と言ってよい。館の内部には当主の起居する建物や従者の居住の場、厨などがあり、広い空間の庭園があり、時として軍勢の結集の場となった。有力武士は、各本領に館を持つ一方で都市鎌倉の中に館を構えた。源頼朝に随従して関東に下った安達氏は鎌倉甘縄に館を構えた。蒙古襲来（文永の役）の後に、功績による恩賞を求めてやってきた九州の竹崎季長は、この甘縄邸の安達泰盛を訪れた様子を「蒙古襲来絵詞」に記録している。この邸宅の部分は、館内の泰盛邸家屋を記したもので、門外で馬から下りた季長主従が堀に掛けられた橋を渡り、門の所で出迎えた安達氏家臣王松氏に挨拶し、家臣団控えの間の南面の庭で待ちやがて泰盛に謁見する。甘縄館は、堀と土塀に囲まれたものであることが判る。次は下野国足利荘の鑁阿寺は「おとり町」という東山道の町場から北に入った所で二町四方（台形）の方形館があり、幕府の要人足利義兼の館が没後に寺になり、館跡の周りに十二院が建ち、一年交代で年行事を勤めた。「館寺という」

第二　今小路西遺跡跡（鎌倉御成小学校）は誰の館か

ＪＲ鎌倉駅西にある今小路西遺跡は、昭和五十九年から六十年（一九八四から五）に御成小学校改築問題と絡んで緊急発掘され鎌倉郡衙と武家屋敷の発見となり、後者から大量の輸入陶磁器などが発見された。出土遺物のなかに板番文が発見され、五味文彦氏「中世考古学の視線」（二〇一七年刊行予定、高志書院）では多の番文と併せて、近くの無量寿院

（御成隧道東にあった無量寿院

資料一　今小路西遺跡出土板番文

定

もうすけ　小屋門番　勤仕

し□□□□殿　こや門はんきんしの事

左衛門

一番　飽間の二郎さえもん殿

潮田　の

うしおだの三郎殿

佐々木　多右衛門

ささきのたえもん三郎殿

粕谷の

かすやの太郎殿

二番

新作　の

しんさくの三郎殿

余部　左衛門

よべぎゃうふさえもん入道殿

三番　小殿

大小殿

旨　守　遅怠

右・番のむねをまほりて、けたいなく一日

勤　状

一夜御つとめあるへきのしょう・如件

文永二年五月　日

（廃寺）において安達義景十三回忌（六月三日））において法要の際の「番文」と推定している。この番文の一番冒頭の飽（秋）間二郎左衛門は、安達氏の有力家臣と推定される。弘安八年（一二八五）十一月の霜月の亂で、北条氏と平頼綱（禅門）に滅ぼされた時の記録があり、安達泰盛（館は甘縄）は、松ガ上（谷）に留まっていたが、その後の行動によって「塔ノ辻ノ屋形」（館）に出た所を北条貞時に攻められて滅亡したという。

資料二

安達泰盛亂聞書　○熊谷直之氏所蔵梵□
戒本疏日珠抄裏文書
（覚真、安達泰盛）（安達宗景）（安達長景）
城　入道　并城助・美乃入道
（安達時景）
・十郎判官入道、一門皆被伐了、奥州入道
（弘安八年十一月）　（谷）
十七日巳剋マテハ松カ上ニ住、其後依世中
動、塔ノ辻ノ星方ヘ午時ニ出かける二、被
（北条貞時）
参守殿云々　死者卅人手オイハ十人許
判官
□□□□□□□□テ城十郎入道ユヤマヘ

この塔ノ辻は今小路と長谷小路の交点で御成小学校の南に位置し、この遺跡の屋敷は、安達氏の屋敷と考えて良いと思う。（泰盛、宗景）安達氏館を中心に、家臣団、被官屋敷、商業地区が配置されている。

第三　城郭の形成

南北朝内乱期の戦乱が恒常化する地域では、城郭の形成が見られるが、やはり本格的な長期戦乱（享徳の乱）を画期として多くの城郭が出現し、戦国時代に至る。

① 館から城へ

中心の館の周囲に縄張りを拡大して外構、内構の城郭が形成される。（例、群馬太田氏反町城）原形は新田岩松氏一族の堀口氏館跡と考えられるが、それが改造されて反町城となり戦国期には金山城由良（横瀬）氏の支城となった。近世に入って照明寺の中に移築した。

② 館の背後丘陵に城

館の背後一キロほどの山上に五つの郭から成る山城を築く。郭と郭の間に、堀切を設ける。敵が襲ってきた場合に資材や食料を運んで籠城する。

③ 水辺（沼）を活用した城

館林城は、南の城沼といわれる広大な沼を利用し半島状に突き出した八幡郭・本丸・二の丸・三の丸を構築し、その北側に水路を隔てて外郭を設ける。その北側には広大な四つの郭を設け、その内部は家臣団

屋敷、商職人の屋敷が包穣され、それらを外構堀をもって囲む。享徳の乱とそれ以降の合戦において攻防戦となり、度々の落城を体験した。近世大名の城郭となった。

④ 河川崖上の城（崖端城）

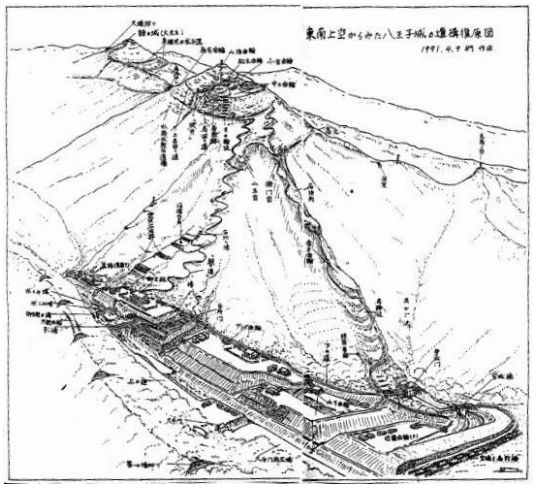
栃木県小山城は、小山市の思川北岸にある。河川に削られた急崖を西の防備とし、東側は堀を持って囲む。そこに四つの郭と高台をなす二カ所に郭（天守郭）で構成される。南北朝期、小山義政の亂の攻防の場となりそれ以降の戦国期まで、下野国最大の豪族小山氏の拠点となった。

⑤ 山城と下の館空間を統一した戦国期の城郭の完成形

八王子市の研究者椚国男氏の「戦国の終わりを告げた城」（六興出版一九九一年）の復元図（鳥瞰図）によれば、八王子山の下には、御主殿といわれる城主豊穣氏照の館が有り、その東にアシダ曲輪、山下曲輪などの軍勢の終結できる空間が有り、さらに東には近藤曲輪など家臣団の集住地がある。天正十年（一五八二）にほぼ完成し、天正十八年に豊臣秀吉の侵攻を受けて落城した。八年間の城であった。

四　むすび

城郭構築には、領内百姓の動員、城内には百姓が食料や財産を持って立て籠もる百姓の郭も必要である。

一口メモ

現在鋸南町に江月という所がある。此処は、源義経が京都へ攻め上るとき佐々木高綱と梶原景季が、宇治川の先陣争いで名馬「池月」と「磨墨」が活躍した。この池月こそがここ江月の生まれたところだと言われている。